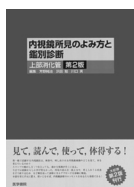


内視鏡所見のよみ方と鑑別診断

上部消化管 第2版

編：芳野 純治，浜田 勉，
川口 実B5 頁432 2007年
定価 12,600円(本体 12,000円+税5%)
[ISBN 978-4-260-00313-1]医学書院刊

もう30年以上前になりますが、教室の前身である東大分院外科で研修していたとき、毎週木曜日に諸先輩や内視鏡診断に意欲のある先生方が症例を持ち寄って内視鏡の読影についての勉強会があり、わからないながらも参加していました。そしてあるとき、当時の順天堂大学教授でおられた城所允先生から、「内視鏡でいちばん重要なのはGedankengangだ」と教えていただき、この考え方が内視鏡診断の原点となっています。

つまり、内視鏡像を読み取って疾患を診断し、その病変の範囲や病態を頭に描き、そのうえで1枚1枚の内視鏡写真が見る人へのメッセージとなるよう、その疾患がわかりやすいように提示することが大事であるということです。その意味で、内視鏡写真はまさに芸術でありアートです。しかしながら、最近ではコンピュータ上で何枚でも撮影でき、また、消去できるためか、よく考えもせずにやみくもに写真を撮り、その後でゆっくりと見て診断しようという傾向があるように思えます。また、色素内視鏡や拡大内視鏡、NBI(Narrow Band Imaging)などさまざまな方法が開発され、より病変が見やすくなっていることもこの傾向を助長しているように思われます。すなわち内視鏡診断の基本であるGedankengangが少し疎かになっているのでは、と老婆心ながら危惧しています。

さて、このGedankengangをしっかりとし、そして表現するために必要なことは、数多くの内視鏡像を見ること、また数多くの疾患を経験することです。しかしながら、実際に1人で経験できる症例やその数には限りがあります。その点において、本書は、305例の症例提示という数はもちろんのこと、通常よく経験する症例のみならず比較的少ないが鑑別診断として知っておくべき症例が数多く提示されており、大変参考になります。

本書の構成としては6つの章から成っており、

まず第1章から第3章までは、咽頭から十二指腸までの上部消化管内視鏡における基本的事項が書かれています。続いて第4章で咽頭・喉頭と食道、胃・十二指腸の疾患について、豊富な内視鏡像や病理組織像が提示されています。第5章では、内視鏡医にとって決して疎かにしてはならない生検組織診断についてわかりやすく解説がなされています。そして最後の第6章では、内視鏡診断や治療において知っておくべき各種の分類や規約、用語などが掲載されています。まさに内視鏡診断と治療に関する辞書と言えます。

特に本書の中心となるのが第4章の「所見からみた診断へのアプローチ」です。その最大の特徴は疾患名、病名を列挙してそれに関する画像を提示しているよくあるパターンではなく、実際の内視鏡検査をしている立場から記載されていることです。すなわち病変が盛り上がっているのか、陥凹しているのか、また狭窄病変であるのか出血している病変であるのか、といった観点から豊富な症例が提示されています。そして何よりも、その所見の説明や解説においてGedankengangが簡潔に記載されており、内視鏡診断の原点が示されていることが特色です。

もうひとつ本書の目玉としては、食道癌、胃癌の深達度診断について詳しく記載されていることです。この深達度診断はGedankengangが基礎であり、治療をするうえできわめて大事であることは言うまでもありませんが、最近ではEMRやESDが比較的容易、かつ安全にできるようになったこともあり、診断的治療としてやや安易に行われていることが問題です。その意味でも、深達度診断について内視鏡像のみならずX線造影写真、そして切除標本も示しながら解説されており、教科書としても価値の高い内容となっています。

したがって、これまでに経験しなかったような内視鏡所見に遭遇した場合、内視鏡検査の合間に本書を手に取りページをめくっていくだけで大変勉強になり、また診断の向上にもつながります。このようなすばらしい内容にするためには、編集や執筆に当たられた先生方のご大変なご努力があったものと思います。心より敬意を表します。

以上より、本書は初心者から超ベテランまで、内視鏡に携わるすべての人にとって教科書であり、辞書でもあり、必携の書として強く推薦いたします。